

1980年代から現在までのウェディング・セレモニーの変遷

The Changes in Wedding Ceremonies since 1980s

石川 夕起子* 河内山 潔*
Yukiko ISHIKAWA Kiyoshi KOUCHIYAMA

抄録

本論文では、1980年代から現在までに大阪・神戸エリアで司会者として携わったウェディング・セレモニーから、その変遷を様々な観点からまとめることを目的とする。そこでは、「家」を重視する思考から、「個」を重視する思考への変化とともに、初婚年齢の上昇に伴う新郎新婦のこだわりを見出すことができる。そして、こだわりやもてなしを実現するための経費が、親や身内への依存から新郎新婦本人達の負担に徐々に移り変わったことも見出せた。また婚姻儀式における親世代の関わりの後退と、婚姻の当事者である新郎新婦の「新しい家族」としての意識の萌芽を背景として、「絆」の演出が重要視されていることが指摘できる。

Abstract

The purpose of this paper is to summarize the changes in wedding ceremonies through the experiences of the author who has acted as a master of ceremonies since 1980s. This research has clarified some changes. The first is the change of values from “family” to “individuals”. Second, the average age for the first marriage has gone up, and bridal pairs have paid more attention to the reception. The expenses paid by parents have decreased gradually. Finally, the portion of the involvement of parents in the wedding ceremonies has decreased, and the bridal pairs have emphasized the staging to show “ties” of new family.

1. 序論

結婚とは、「2人（以上）の人間が家族として無期限に共同生活をする事」だと定義される¹⁾。また、わが国では一夫一婦制を前提とした上で、「法的な手続きに則った男女の継続するライフスタイル」として、一般的に認識される形態である²⁾。もちろん、世界には宗教や文化の違いによって、こうした定義に当てはまらない多様な結婚形態も存在する。

* 関西国際大学人間科学部

歴史時代における婚姻形態および婚姻儀礼（ウェディング・セレモニー）について、本論文では特に、その内容を時代毎に概観し、その変遷を通史的に検討する。そして特に、1980年代から現在までに、大阪・神戸エリアで司会者として携わったウェディング・セレモニーについて、その時代ごとの変遷を出席者、食事、衣裳など様々な角度からまとめる。

2. 婚姻通史

2.1 婚姻史

わが国の婚姻史は、婿取婚から嫁取婚へ、そして寄合婚へと3つの段階に大別され、その前段階として群婚を想定する³⁾。はじめ、男女は個別的でなく、群にあって群居したと考えられる。群婚とは、部族内婚と部族外婚とに分かれるが、まず部族内婚によって子孫とともに混在し、それがしだいに分岐群や隣群とのあいだの部族外婚に発展したと考えられる⁴⁾。

そして婿取式婚姻は招婿婚ともいわれ、群婚に続く対偶婚とされる⁵⁾。この形態の特徴は、身柄や生活の根拠は各自の氏族にあり、夫は妻方に通ったり、滞在したりするが、その結合は弱く、離合が容易なことである。夫婦関係は、いわば恋愛関係のようである⁶⁾。そして、妻問婚、婿取婚（前婿取、純婿取、経営所婿取、擬制婿取の各段階）に細分化される⁷⁾。

また嫁取式婚姻は、妻が完全に夫方同居となり、夫方の家父長の族中に同居することになる。女性の経済的地位の低下と、家父長制の確立による私有財産の相続により、女性が家事奴隷や相続者を生む生殖の面でも必要とされ、主に戦国期の武家層からおこったとされる⁸⁾。

寄合婚とは、近代（明治期以降）社会の男女同権的単婚制であり、男女が平等な人格と権利を持って自由結合する個人型の一夫一婦婚とされる⁹⁾。この婚姻形態は、欧米では既に数世紀を経過したとされるが、日本では明治（時代）から萌芽期に入ったとされ、現在の主流な婚姻形態となった¹⁰⁾。

こうした婚姻形態の変遷とともに、それに伴う儀礼・儀式としての婚姻儀式も変化してきた。次章において、婚姻儀礼の変遷について概観することとする。

3. 婚姻儀式の変遷

3.1 婚姻儀式とは何か

世界の婚姻に関する儀礼（いわゆる結婚式）は、宗教や文化、伝統の違いなどによって、それぞれ独特の形式を持っているが、共通する目的や構成要素も見出すことができる¹¹⁾。そのうち最も重要な要素となるのは、「夫婦になる同意の約束を交わし、それを社会的事実として確立する」ことである。このために、当事者同士、あるいは当事者が属する家同士が結婚の誓約を交わし、これをもって当事者は夫婦となり、この事実を当事者の属する家や当事者を取り巻く社会（友人や職場関係者など）が承認し、これを宣言することによって完結する一連の儀礼的要素である。本章では、この誓約を婚姻儀式の中心的要素とした上で、誓約を行うための様々な儀礼的要素の変遷を、先行研究に基づいて、時代を追って検証していくこととする。

わが国での婚姻形態の変遷に従って、婚姻儀礼の変遷をみると、招婿婚の時代（～平安時代）、嫁入婚の時代（武家政治時代～明治・大正期）とそれ以降から現代と3つの時代に分類される。

以下、それぞれの時期における婚姻儀式を概観し、その特徴を明らかにしていくこととする。

3.2 招婿婚の時代

高群（1963）によれば、「ツマドイ（妻問い）」という語は「記・紀」や「風土記」などから「万葉」までみられ、「ムコトリ（婿取り）」の語は、平安時代の「大和物語」に1語、その後は「落窪」「宇津保」「源氏」「枕」「栄花」「鑑もの」「今昔」などから、鎌倉初期の「愚管抄」「源平」その他あらゆる文献にみられ、南北朝ごろまで続く¹²⁾。ここでいう妻問いは奈良期ごろまでに支配的にみられる招婿婚の形態であり、婿取りは平安期から鎌倉期ごろまでに支配的にみられる招婿婚の形態である¹³⁾。

まず妻問いでは、妻問いの男が、直接女に対して求婚する。それを女の背後にある女側の共同体が承認または否認する。ここでは、共同体の代表者たる族長の意向が考慮される。妻問い婚は対偶婚であり、群婚の集団婚という形態から、個別婚として一对の男女が自由に結合できる婚姻形態の出現であった。そして、男から妻問いものと呼ばれる手土産を聘物または聘財として受け渡す納采という儀礼が行われた。それに対して、女側からは、「婿取りの礼物」と呼ばれる饗応の品や物品が送られることがあった。

次に婿取りでは、まず当人同士の求婚がなされるが、女の側に母という存在が出現して監視し、あるいは黙認し、さらに事後的に承認を与えて男を婿として通わせ、また住まわせる権利を持つようになる¹⁴⁾。婿取りの儀礼的要素として、トコロアラワシ（露頭）がおこなわれた¹⁵⁾。この儀式が済むと、男（婿）はしのび通いを止め、公然と通ったり、住み着いたりする。その後、この露頭に先立って、ニイマクラ（新枕）と呼ばれる儀式が定着する。新枕の儀式では、ケシキバミ（求婚）、フミヅカイ（文使）、婿行列、ヒアワセ（火合）、クツトリ（杓取）、フスマオオイ（衾覆）、キヌギヌツカイ（後朝使）などの諸行事が行われる。さらに、新枕、露頭という二つの儀式に、露頭の日に従来の三日餅の行事の他に、親族対面（婿と妻の親族の対面）、供人饗禄（婿の供人への饗禄）、政所始（婿の家政所の設立）が加わった。

ここまでの婚礼儀式を行う場所は主に女側の住居であったが、平安末期になると婚主（妻側の父または後見人）が、自家ではなく経営所と呼ばれる場所を借り受けて用意し、そこで婚礼を行うようになった¹⁶⁾。また、作法・儀礼の面では、新枕から露頭の儀式が略式化され、新枕の日と露頭の日を一緒に行うようにもなっていた。

3.3 嫁入婚の時代

婿取婚の時代でも、女が生家や新居で婿を取った後、婿の家に初入（行始）していた。これがヨメイリであり、当初は単なる夫の家への挨拶であった。その後も、嫁が夫の家に加勢にいたり、仮滞在をしたりするうちに、夫の親が避居したり、死去したりした時に、荷物を夫の家に運び込み、生活するようになる。その後、こうした慣行が定着して、婚姻形態としてのヨメイリ（嫁入）と呼ばれるようになったと思われる¹⁷⁾。

嫁入婚の本質は、「家父長が嫁をとる」ことであって、当事者の合意よりも私有財産の父系相続を何よりも重視する形態にある。婚礼儀式も夫側の住居に嫁を迎えることが中心である。家父長の住む主屋の周りに立てられた多くの別棟で、長男以下男子は自分の起居する部屋に引き入れ、事実上の婚姻関係を結び、事後承認として家父長の承認を取り付けることから始まり、次第に家父長自身が采配する形態へと移行した。そのためこの時期の嫁入婚について、多くは「密儀」の語が用いられ、輿の方式も夜迎への召上式が多く用いられた。その後、嫁が婚家に入る際の作法

が整備され、それに伴って輿の受渡に関する作法が工夫されるようになった。嫁を輿に乗せて、のしをつけた多くの荷物や、華美に飾った花嫁を、嫁側の大人数で新献させる進上式に変化した。

3.4 寄合婚の時代

寄合婚の時代になって、婚礼も夫の親の家を式場とする方式から、神社、寺院、公民館等を式場とする方式に移ってきた¹⁸⁾。夫方の扱いで式場を選定し、披露の宴の後、新夫婦は新婚旅行に立ち、さらにその後は、夫方に同居するなり、新世帯で新居に起居することになる。神前結婚の方式は、新郎新婦が三三九度の盃を神前で酌み交わし、媒酌人が誓詞を読み、親族の盃で終わる。また、寺院での結婚やホテル、デパート等での挙式もあり、式後は、料理屋、ホテルで宴会を行い、新婚旅行に出かけるパターンもあった。

この方式の端緒として特記されるべき出来事は、1900年(明治33年)5月10日、当時の嘉仁皇太子(後の大正天皇)と九条節子様(後の貞明皇后)の婚礼であり、宮中賢所で行われたものである。この婚礼を機に、民間(一般人)の神前結婚に対する興味・関心が急速に高まったといわれる¹⁹⁾。意外にも、こうしたスタイルの歴史は浅いのである。

以上、上代より現在に至る婚姻形態と婚姻儀式について、通史的に概観してきた。形態の変化とともに、儀礼・儀式も変化してきたことが解る。次に、最近の婚姻儀式(ウェディング・セレモニー)について、筆者の司会者として関わってきた経験を基に様々な視点から考察を行うこととする。

4 1980年代以降のウェディング・セレモニーの変遷

4.1 人について

① 親・親族

男女ともに適齢期といわれる年齢が来ると、地域・社会ぐるみで結婚へと導いた時代、それは1970年代もまだ根強く残っていた。「家と家との結びつき」が重要と考えられる時代から、現代の個人の結婚へと結婚観が変わっていく中で、結婚式・披露宴のカタチも大きく変わっていく。

実際、1980年ごろの結婚式・披露宴の参加者は親兄弟・親族が大半を占め、列席者には、当人の仕事関係・友人の他に、親の関係者の出席が目立った。親の上司・親の友人・隣保など、新郎・新婦当人達の面識のない人物からの祝辞が当然のように行われていたのである。これは「家と家」の儀式であった結婚式にとっては、自然なことであった。

現代の結婚式では、ホスト・ホステス役が新郎・新婦という認識で、親や兄弟もゲストとして招くスタイルが多く、招待状も親の名前で出すものから新郎新婦名で出すようになり、主催が「家」から「個人」になってきた意識の変化がみられる。結婚式・披露宴では新郎・新婦がすべてのゲストをもてなすスタイルとなり、親・兄弟にもゲストとして感謝を伝える場となってきている。招待客も、二人を中心に構成され、面識のない招待客は、見られなくなってきた。

② 仲人・媒酌人

1990年代までは、仲人の存在が大きく影響していた。仲人は、適齢期の男女の縁を繋ぎ、結婚式や披露宴でも「媒酌人」の役割を果たす。新郎新婦は勿論、両家の意見や要望は必ず仲人を通し、両家や当人の間を取り持つクッション的な存在であった。その昔、相手の顔も見ずに結婚していたと言われる時代は、婚姻率が100%と言われていたほどである。

結婚における仲人の役割は、縁を繋ぐことから始まり、結婚式を行うにあたって、両家の間をとりもつ。また、結婚後も夫婦間・両家間に位置し、その役割は続くのである。これは、結婚後8年間は中元・歳暮など心づけをすることが慣習となっていた地域も多くあることからわかる。

やがて仲人でも、「頼まれ仲人」と言われる存在が出てきた。これは、恋愛結婚が増加し出会いが当人同士の意思によるものになってきたことを背景に、結婚式・披露宴の立ち会いをするというこの役割を担う「媒酌人」と呼ばれる存在である。媒酌人を立てる人は1990年代中頃より、年々減少傾向にあり、現在では媒酌人を立てる人を探す方が難しい。2000年代に入り、媒酌人の存在が微妙になってきた当初は、カップルから「メインテーブルに2人だけはおかしいですか？寂しいですか？」などという質問を良く受けた。今ではメインテーブルは2人が当たり前ものとして、認識されているが、この現象はほんの10年くらいの間での出来事である。入場シーンも、媒酌人の先導がない方が、写真にもきれいに二人だけが納まり、「個」を大事にする今の時代にはあっていると思われる。

披露宴における媒酌人の役割は、披露宴の冒頭に、「媒酌人挨拶」というシーンがあり、「挙式の報告・新郎新婦の紹介・挨拶」と、3つのことを織り交ぜて挨拶が行われた。媒酌人がなくなった当初は、司会者がそれを担っていたが、やがて「新郎挨拶」と言う、新郎よりゲストに対して行われる「ウェルカムスピーチ」へと変わっていく。これは、披露宴が、全国に放映された芸能人が、結びの挨拶として新郎本人が行ったことが、感動を呼び、大きな反響となったこともあるが、まさに家と家との結婚という意識から、個人と個人との結婚へと、意識が変わってきたからであるともいえるだろう。

4.2 衣裳について

神前での挙式が主流だった時代から、ウェディングドレスに対する憧れから、「ウェディングドレスを着たい」という要望が増え、挙式スタイルも、神前結婚式から、キリスト教式結婚式が増えてきた。また神前結婚式を選んだ場合であっても、まず白無垢で挙式を挙行し、その後ゲストを披露宴会場にいざなう「立礼」といわれる、新郎新婦が行うお迎えの時には、色打ち掛けへ衣装替えをする「掛け替え」をする人が増えた。白無垢で挙式・色打ち掛けで入場、そして次には振袖へお色直しがされる。この振袖は、原色の派手なものが多く、またその時の髪型は、「かつら」が用いられ、「尾長」や「姫スタイル」といわれる髪が用いられていた。次の色直しとして、ウェディングドレスやカクテルドレスが用いられた。白無垢→色打ち掛け→振袖→ウェディングドレス→カクテルドレスというように、色直しは、3回から4回行われるのが主流であった。

キリスト教式結婚式を選んだ場合も、ウェディングドレス→カクテルドレス→白無垢→色打ち掛けのように、洋装→洋装→和装→和装、または、洋装→和装→洋装というように、やはり3着から4着の衣裳替えをする。色直しで、新郎新婦がほとんど宴席にいない状態でお祝いが続いていく。そのため新郎・新婦が不在の宴席の中で、いかに盛り上げるかが問われていた。

現代では、ゲストへの配慮に重点を置き、退席中は演出を控え食事談話を中心に、ゆったりしたウェディングが望まれているため、お色直しも1回が主流である。

4.3 会場・料理について

会場のレイアウトについて、現在の会場で多く見られるように、ちらしテーブルと言われる1卓が10名以内でセッティングされるようになるまでは、新郎・新婦の親族・招待客を、それぞれ

向かい合わせの長いテーブルに着席させる流しテーブルと言われる宴席が作られていた。そのために、新郎側・新婦側の着席させる人数を揃える必要があった。

また料理も、和会席を中心に、一部を除いて最初からセッティングされており、結婚式は冷めた料理を食べるといった印象が強かった。今では、暖かいものを暖かいうちに、冷たいものを冷たいうちにといい配慮がなされ、料理の味・ボリューム・色彩などこだわりをもとめられるようになってきた。厨房があるホテルであれば、和洋折衷が可能であり、こだわりのホテルでは、ひとりひとりに、和または洋のメニューを、招待状の返信とともに、リクエストをうけるというサービスも試みられている。実際に体験したが、隣と料理が違うものが運ばれて来た際には、サービスはここまで個人の要望を取り入れるようになったのかと感心したものである。

4.4 演出について

バブル期には華やかな演出が目立った。入場の際に、スモークやゴンドラ、ステージの幕が開き、スポットライトの中で入場というのも珍しくなかった。ケーキ入刀の瞬間にもドライアイスとお湯を利用してのスモーク演出はかなり人気であったことを記憶している。

新郎新婦が色直しで中座し、席にいないうちに披露宴が進行していくため、ビデオの収録は必須であった。1976年にVHSが一般化され、1996年にDVDとなって登場したが、披露宴のあり方が変わるにつれ、またホームビデオの普及により、記録映像としての需要が減少していった。それにより、映像は記録から演出へとカタチを変えて登場することになった。こうした映像による演出は、オープニングでは、メイキングや二人の軌跡、プロフィール用の生い立ちとして、エンディングでは、招待客の送り出しのエンドロールとして人気がある。

入場シーンとしては、ゲスト卓のキャンドルに、新郎新婦がキャンドルに火をともし廻る、「キャンドルサービス」の人气が今も根強い。これは、ゲストとの距離を近く保ち、儀礼の気持ちと、おしゃれな演出としての両面を満たすもので、最近ではキャンドルに代わる光の演出として、新郎新婦がそれぞれの瓶から水を注ぎ合わせた瞬間に発光する、化学反応を利用した「フェアリーイリュージョン」といわれる演出も人気となっていった。

新郎・新婦はメインテーブルに座り、両脇は媒酌人が着席する宴席での入場は、司会者の進行によって進んでいく。入場順は、媒酌人→新郎→新婦と媒酌令夫人である。媒酌人の前には先導役がおり、メインテーブルまで案内する。

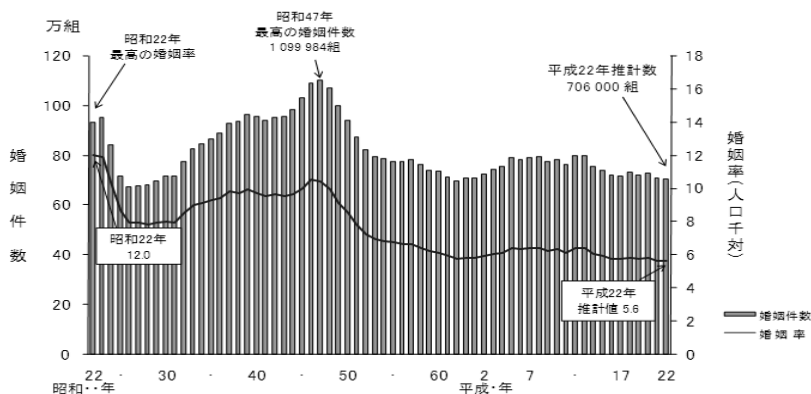
宴会の進行は、司会者の開宴の辞の後、媒酌人挨拶10分程度、主賓の祝辞両家1名ずつ各5分程度、そして乾杯までの時間を、披露宴の中でも披露式と呼ばれ、厳粛な場とされていた。乾杯後、祝宴へと進むが、色直しのために新婦は即退席し、介添えは媒酌令夫人が行うのが一般的であった。

現代のウェディングとは、入場段階から大きく変わってきている。「こうでなければならぬウェディング」から「自分らしさのウェディング」に変わってきたと言える。

下記、厚生労働省が毎年発表している「人口動態統計の年間推移を見ると、1972年、1,099,984組という最高の婚姻件数を記録した時代、だが2000年代には、706,000組にまで減少する。

1980年代から現在までのウェディング・セレモニーの変遷

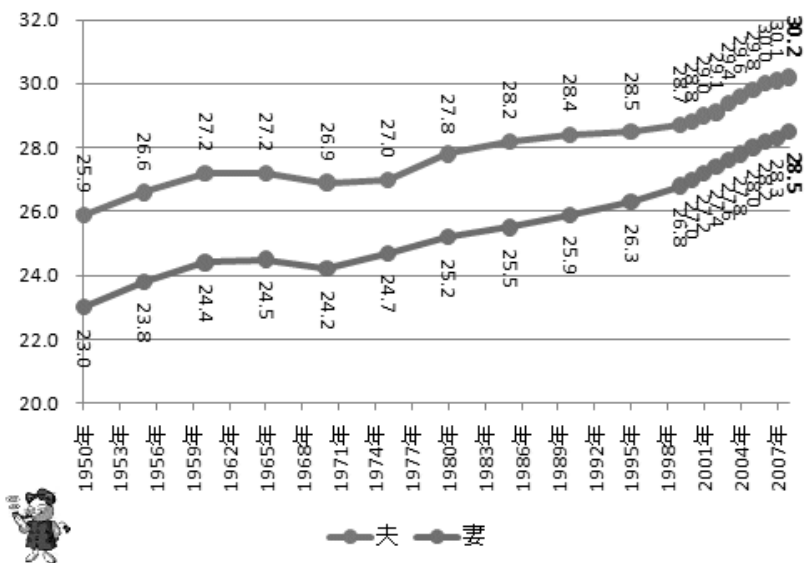
図表1 婚姻件数及び婚姻率の年次推移



(出典：厚生労働省 平成22年人口動態統計の年間推計)

また、図表2からもわかるように、初婚年齢は年々上がってきている。

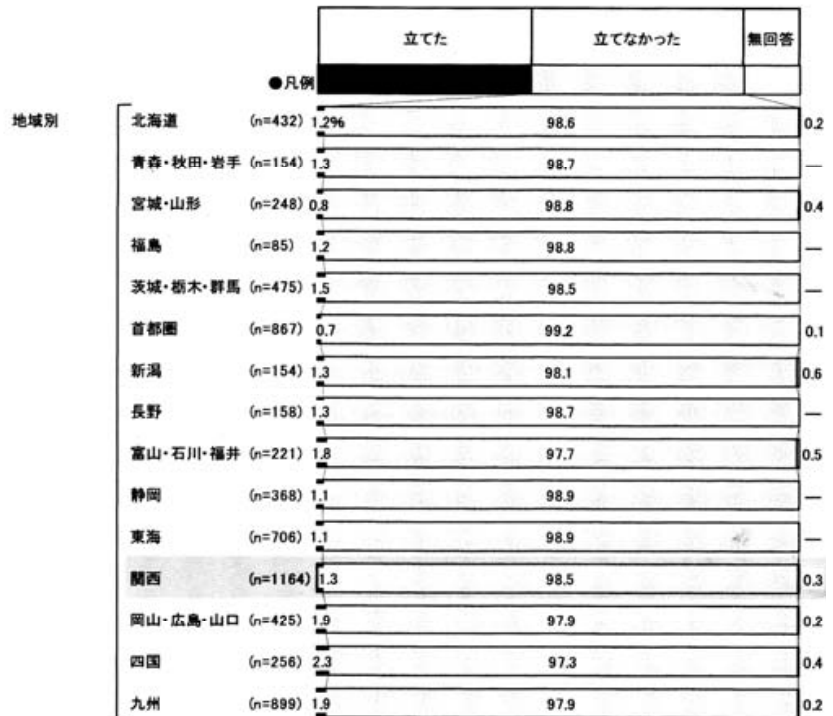
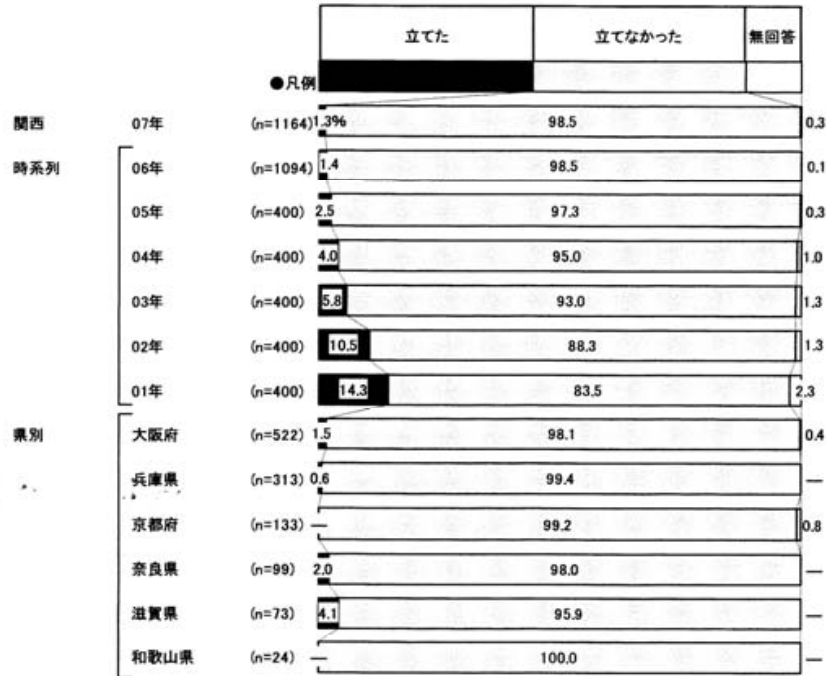
図表2 平均初婚年齢の推移



(出典：<http://www.garbagenews.net/archives/1219043.html>)

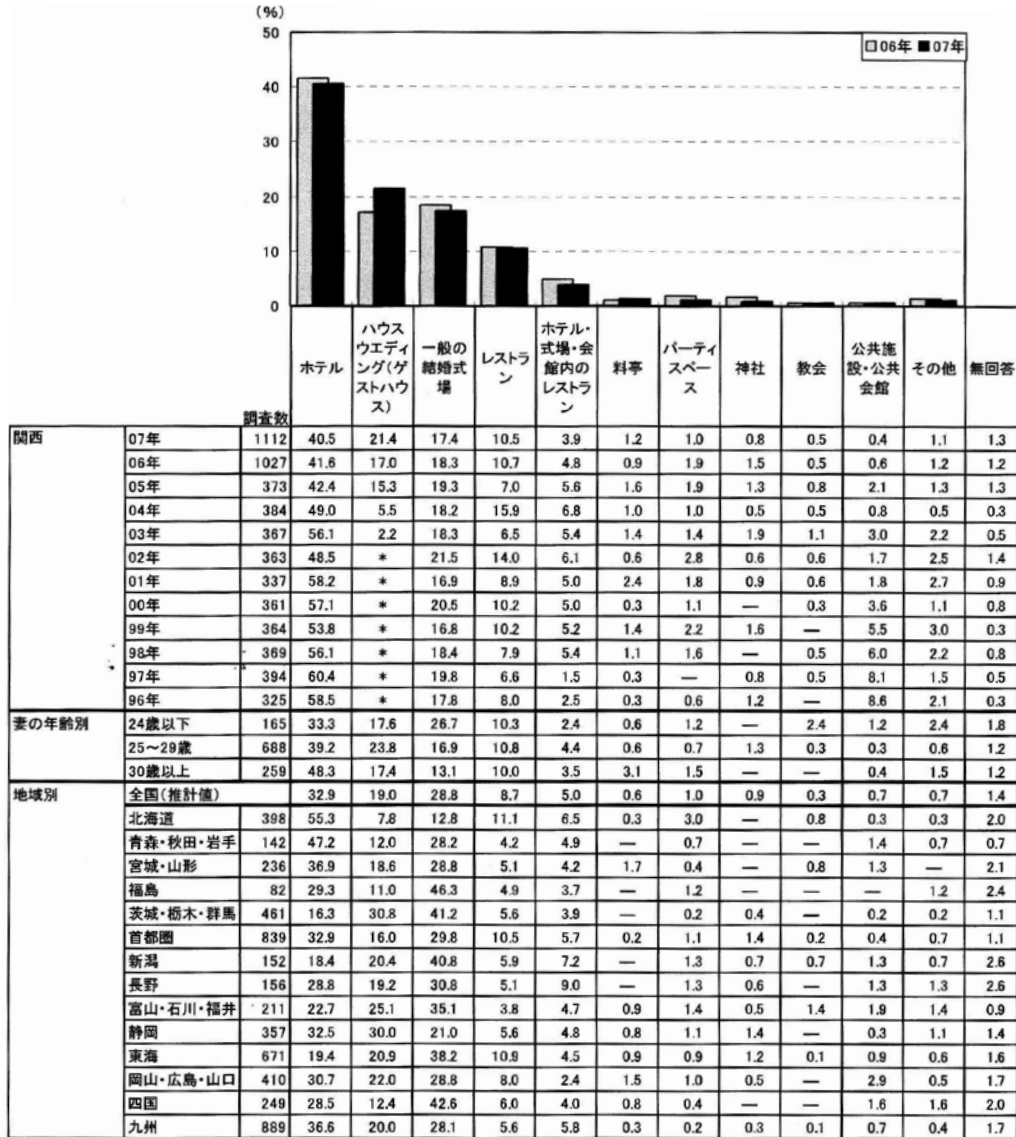
厚生労働省人口動態統計の年間推計平成20年人口動態統計「都道府県別にみた年次別平均婚姻年齢—初婚の夫—（各届出年に結婚生活に入り届け出たもの）2008年」および「都道府県別にみた年次別平均婚姻年齢—初婚の妻—（各届出年に結婚生活に入り届け出たもの）2008年」より作成した。

図表3 仲人の有無（全体／単一回答）



（出典：結婚情報誌『ゼクシィ』リクルート発行調べ）

図表4 披露宴・披露パーティー会場の推移



*02年以前：該当項目なし
 ※97年以前：「教会」は「教会(国内)」「教会(国外)」の合計。また、「パーティースペース」は「レンタルスペース」という選択肢

女性の社会進出増加による晩婚化は続き、初婚年齢が上昇していく中、自身が結婚式を挙げる時には、友人の結婚式に参列している経験から、また貯蓄もあり「こだわり」が増し、結婚式にかかる費用も上がってきている。「家と家との結婚」の時代は、結婚費用も「家」として、親の負担となっていたようである。その分、ご祝儀も「家」のものであったという。現代は「個」の結婚であることから、結婚費用も自己負担となり、費用の点からも晩婚化が進んでいるとも言える。しかしある意味、いつの時代も「家」を大事にすることに変わりはない。ただし「家」の意味合いが違ってきている。かつては「家と家との結びつき」と言われる「家を重んじる」あり方であり、現代は「個としての家族」に重きをおいた「家族」を意味する。現代の結婚式は、親に対す

図表 5 結婚式のスタイルの変遷

	仲人 媒酌人	夫 平均 初婚年齢	妻 平均 初婚年齢	主な会場	披露宴演出
1980年代	あり	28歳	25歳	結婚式場	カラオケ・謡など
1990年代	ほぼあり	28.5歳	26歳	ホテル・式場	キャンドルサービス
2000年代	ややあり	29歳	27歳	ホテル・レストラン	生ケーキ
2010年代	なし	30歳	28歳	ホテル・神社 ゲストハウス	エンドロールなど映像

る感謝，ゲストに対するおもてなしなど，希薄となった昨今の人間関係が問われる中で，「絆」を大切にしたいセレモニーとして存在すると言えよう。以下の図表5に，図表3・4および筆者の経験を基に，結婚式のスタイルの変遷を簡単にまとめてみた。

5. 結論

図表5の通り，結婚式の主催者が家（親）から当事者である新郎新婦に変わるとともに，結婚式のスタイルも変化してきている。それは，家・親族や隣保などを重視する思考から，個としての「家族」を重視する思考への変化であり，主催者である新郎新婦の初婚年齢の上昇とも無縁ではないと思われる。

結婚式・披露宴の参加者は親兄弟・親族が大半を占め，列席者には新郎新婦本人の仕事関係・友人の他に，親の関係者の出席が多くあったが，近年ではホスト・ホステス役が新郎・新婦という認識で，親や兄弟もゲストとして招くスタイルが多く，招待状も親の名前で出すものから新郎新婦名で出すことも多くなった。新郎新婦のこだわりを表現するために，場所も定型の儀式や進行が主流となる神社や式場から，より自由なスタイルが選択できるホテルやゲストハウス・レストランへと変化した。衣裳や食事，披露宴の演出もゲストをもてなすための機能を重視する方向へと変化してきている。

また婚姻儀式において，主流であった仲人や媒酌人の存在がほとんどなくなり，経費の負担も当事者達が賄うようになり，親世代の関わりが大きく後退したと考えられる。また初婚年齢の上昇は，恋愛期間が長期化したたり，婚前に共同生活を送ったりと，婚姻儀式以前の婚姻当事者同士の意思疎通を図るための時間の増大をもたらしていると考えられる。そのため，婚姻儀式の当事者である新郎新婦は，多くの場合，結婚式や披露宴を迎えるまでに，「新しい家族」としての意識が芽生えることになるように思う。こうした意識の萌芽を背景として，自分たちの「新しい家族としての絆」やまた新郎新婦双方の生家との「家族の絆」など，人間関係を協調するような演出が重要視されていることが指摘できるのではないだろうか。もっとも，大阪・神戸という大都市部における状況が，すべての状況にそのまま普遍化できるわけではないであろう。しかし，他の地域との差異を認めながらも，通史的にみえてきた儀礼の変遷における一ケースと捉えることは可能であろう。

1900年，後の大正天皇の婚礼の儀から始まった，日本におけるウェディングスタイルであるが，現代のウェディングスタイルになるまで，社会における家族のあり方が，大きく影響しているこ

とがわかる。つまり、個人の結婚観、家族関係、社会情勢までを、ウェディングの形態から時代の変化を知ることが出来ると思われる。今後も、挙式や披露宴スタイルの変化に注目していきたいものである。

【注】

- 1) 財団法人日本ホテル教育センター編「世界・ブライダルの基本 The Basic Knowledge of Bridal around The World」日本ホテル教育センター、2008年、p23。
- 2) 日本ホテル教育センター上書、p22。
- 3) 高群逸枝著「日本婚姻史」至文堂、1963、p6。
- 4) 高群上書、p1。
- 5) 一対一の結合であるが、この結合は弱く、離合不定である。この段階には、群婚の延長または遺習とも見なすべき多夫多妻的現象の併存がみられる。
- 6) 高群上書、p35。
- 7) 高群上書、pp6-7。
- 8) 高群上書、pp208-209。
- 9) 高群上書、p243。
- 10) 高群上書、p243。
- 11) 日本ホテル教育センター上書、p44。
- 12) 高群上書、pp36-37。
- 13) 高群上書、p6。
- 14) 高群上書、pp75-76。
- 15) 男が女のところに通ってきてしび寝ている現場を女家の人達がおさえてあらわにし、女家の餅を食べさせて、男を女家の一員とする儀式。のちに三日餅ともいわれる。
- 16) 経営とは婚主による婚礼の執行をいう。
- 17) 高群上書、p207。
- 18) 高群上書、p260。
- 19) 日本ホテル教育センター上書、p152。

【参考文献】

- ・株式会社オータパブリケーションズ「ブライダル業界就職・転職ガイド」編集部編「2012ブライダル業界就職・転職ガイド」、株式会社オータパブリケーションズ、2011年。
- ・大間知篤三著「婚姻の民俗学」岩崎美術社、1967年。
- ・糸美奈子著「図解入門業界研究 再新ブライダル業界の動向とカラクリがよ〜くわかる本」株式会社秀和システム、2008年。
- ・佐々木寛著「ブライダル産業の裏側がわかる本」(株)政界往来社、1986年。
- ・鶴蒔靖夫著「ウェディング進化論 ―ブリオコーポレーション 時代への挑戦―」(株)IN 通信社、2006年。
- ・堂上昌幸稿「ブライダル産業のマーケットトレンドーシェアの伸ばすハウスウェディング・施設間競争が激化する中、低価格化、再生案件、業務提携など新たな動きー」『月刊レジャー産業資料』綜合ユニコム株式会社、第44巻第10号(通巻541号)、2011年10月。
- ・服藤早苗監修「歴史の中の家族と結婚ージェンダーの視点からー」[叢書・<知>の森 8] 株式会社森話社、2011年。